

[原著論文]

新型コロナウイルス感染症拡大防止策がもたらした
教育活動の質的転換とその功罪
－ある大学生の認識変容プロセスに注目して－

小杉 進二

山陽小野田市立山口東京理科大学 共通教育センター

A study of qualitative changes in educational activities brought about by
measures to prevent the spread of "COVID-19" and its action and reaction
-Focusing on the process of cognitive transformation of a student-

Shinji KOSUGI

Center for Liberal Arts and Sciences, Sanyo-Onoda City University

要約 (Abstract)

Since 2020, school education activities have changed significantly to prevent the spread of the "COVID-19". "Online lessons," which appeared in search of resumption of educational activities while avoiding the risk of infection, became more widespread and established than expected and exceeded the original purpose of "avoidance of Three Cs."

Anymore, it even shakes the significance of "face-to-face lessons" that have continued to exist as the most popular teaching method so far. Based on our interests, this paper aims to clarify the question, "How do students accept new learning forms such as online lessons and exchange of tasks via "Moodle", and how do they interpret them?".

Our university has already conducted a questionnaire about lessons for students, and statistical processing can give an objective evaluation of lessons. However, the questionnaire survey consists of data that cut out human perception at a particular time. It disregards the series of processes that human encounters an event, accepts, understands, leading up to recognition. Therefore, we conducted an interview survey of several university students and a qualitative analysis using Modified Grounded Theory Approach(M-GTA), clarifying the process of accepting this situation and building their learning.

In addition, we would like to identify the determinants that established the process of restructuring new learning and go beyond the binary opposition of "online or face-to-face" to deepen the essential understanding of lessons. We hope this knowledge will support learners' understanding of the COVID-19 pandemic and provide a new perspective to contribute to teaching methods studies.

Key words: Online lessons, Face-to-face lessons, Innovation of lesson method, Lesson on life during the COVID-19 pandemic, Lesson on life of post the COVID-19 pandemic

キーワード: オンライン授業, 対面授業, 授業改善, ウィズコロナ, アフターコロナ

I. はじめに

(1) 研究の背景

2020年以來、新型コロナウイルス感染症の拡大防止を巡り、学校の教育活動は大きな変化を余儀なくされてきた。感染リスクを回避しながらの教育活動の再開が模索される中で登場した「ZOOMによるオンライン授業」は、またたく間に広がり定着を見せ、教授方法に革新的な変化をもたらした。そして今やコロナ対策としての「3密の回避」という当初の目的を超え、これまで最もポピュラーな教授方法として存立し続けた「対面授業」の意義そのものさえ揺さぶりをかけようとしている。すなわち、「対面授業」はこれまで唯一無二の教授手段として確立されていたが、「ZOOMによるオンライン授業」という新たな選択肢が登場したことにより、「対面授業」を選択するに十分な意義、必然性が理解されなければ、「オンラインで(が)よいのではないか」という素朴な疑念を喚起させてしまう状況さえ生じている。ウィズコロナ、そしてアフターコロナ下の教育のあり方が議論される今、「オンライン授業」対「対面授業」といった二項対立論ではなく、その相補性を模索しながら、「授業とは何か」という本質的な議論の深まりが期待される。

(2) 先行研究の整理と本研究の目的

大学において、新型コロナウイルス感染症拡大防止策として急速に普及したオンライン授業については、本学でも学期末にオンラインの授業についてのアンケートを実施しているように、他の多くの大学でもその検証に取り組まれている。そうしたデータが研究知としてアウトプットされたものとして、以下のような先行研究が挙げられる。

まず、そもそもの問題として「学生がオンライン授業に対応できる情報環境を用意できているか」という点について、中植ら(2021)¹⁾は神戸親和女子大学の学生を対象に①インターネット環境に関する問題、②自分用のパソコンを有しているか、という点について実態調査を実施している。この研究では、①のインターネット環境については学生の9割が問題なしと回答しているのに対し、②の自分用のパソコンの保持については、自分専用のパソコンを保有していると回答した学生が全体の6割に止まっていることを明らかにしている。中植らは大学としてパソコンを用意できない学生への支援や、用意できない事由・背景を把握していくことの必要性を述べているが、こうしたネット環境や情報機器の整備を自己責任とするのか、オンライン授業を推進する以上、大学としてそうした条件整備に何らかの関与・支援を講じていくべきか、という点につい

ては今後も継続した議論が必要となろう。関連して瀧口ら(2020)²⁾は、大学生のテレワークの作業環境について調査を行っている。この結果から、学習机を持たず、ちゃぶ台やローテーブル、ベッドを使用している者が2割程度存在すること、デスクライトを使用している者が5割を切っていることなどが明らかになり、長時間の学習に適する学習・作業環境の整備を課題として提示している。これに対し、越智・館野(2021)³⁾は、居室やパソコンのスペックといった作業環境の問題だけでなく、オンライン授業時の姿勢に起因する疲労感や身体的負担について言及している。

次にオンライン授業の実践と課題について具体的な議論を展開しているのが、田中(2021)⁴⁾である。田中は、授業アンケートによる量的調査及びその量的処理により、オンライン、特にオンデマンド型動画配信であれば「何度でも見返すことができる」「自分のペースで十分な学習時間を確保できる」「時間を有効に利用できる」といった肯定的な評価を析出している。一方で「自己管理の難しさ」「内容の理解不足」「モチベーションの低下」「教員・友だちとの交流不足」というデメリットを指摘し、その改善策として授業者から学生への迅速な学習評価・提出課題へのフィードバックが必要となることを示している。

また、戴ら(2021)⁵⁾は長期間のオンライン授業の継続により生じた「キャンパスライフレス」が学生に与えた心理的影響について、アンケート調査とインタビュー調査の量・質両面から分析している。それによると、「キャンパスライフレス」がもたらす根本的な問題として「実生活での孤独」があり、それが学習面、生活面、対人面の各場面に深刻な影響を与えていることを指摘している。この文脈に関連し、北條ら(2020)⁶⁾も「コロナ禍における大学生の主観的幸福度」について論究している。北條らの調査は2020年7月、つまりオンライン授業が本格的に始まって1学期が過ぎた頃のデータによることもあって、コロナ禍における現況が直接的に主観的幸福度の低下を導くという結論には至っていない。しかし、こうした観点による調査が長期間にわたり定点的・継続的に実施されると、また異なる結果が示されることは十分に予想され、「キャンパスライフレス」と「幸福度」の相関に関する研究は今後の課題と考えられる。

こうしたコロナ禍における大学生活の変容を受けて、いわゆるアフターコロナの大学生活をいかにデザインしていくかという視点から論究するのが泰松ら(2021)⁷⁾である。泰松らは、上記田中(2021)⁸⁾に類似した文脈から「知識提供中心の対面授業であれば、むしろオンライン授業の方が効率的である」という視点に着目し、オンライン

授業をコロナ禍における応急措置と捉えるのではなく、むしろ「恒久的なオンライン授業」を含意する新たな授業デザインが求められる点に言及している。さらに、「恒久的なオンライン授業」がもたらす恩恵として、例えば時間割の組み方などが非常にフレキシブルなものとなることを挙げている。また、同時にそれは大学教員の働き方や大学の運営にも大きく影響を与えることを意味し、例えばオンデマンド型オンライン授業であれば、他大学の所属であっても各分野に長じた教員を非常勤講師として設定することが容易になり、全国的な大学教員ポストの必要総数にも影響が生じることを指摘している。一方で、こうした現状を踏まえた上で「対面でしかできない授業」をいかにデザインしていくかという点についても言及している。こうした議論から、オンライン授業の登場は、それを享受する学習者へのケアやそれを講じる教員の授業デザインに関する問題だけでなく、大学運営のあり方にも議論を巻き起こしていることがわかる。今、「大学における学び」は大きなパラダイム転換の時を迎えようとしていると言えよう。

以上を踏まえると、オンライン授業を巡る先行研究は①オンライン授業・学習を成立させる環境・条件整備に関する研究、②オンライン授業・対面授業を含む、よりよい授業方法論を模索する研究、③(コロナ禍における)オンライン授業がもたらすキャンパスライフに関する研究、といった大きく3つの論点と、④これらを踏まえ総合的に今後の授業のあり方を問う研究に整理することができる。特に④の研究にあたっては、①～③の研究知見をエビデンスとした多角的・多面的な議論が期待される。そこで本研究では、狭義には上記②の視点を関心として研究をスタートさせつつ、それに付随する環境・条件整備の問題やキャンパスライフの問題を踏まえ、オンライン授業は、対面授業をスタンダードとしてきたこれまでの教育活動にいかなるインパクトを与えたのかを検討したい。

II. 研究協力者及び研究方法

(1) 研究協力者の属性と調査方法

上記の研究目的の達成のために、2021年度後期に開講している「教育課程論」を受講する本学工学部3・4年生29名を本研究の研究協力者とした。なお、調査方法は以下の通りである。

- ①「教育課程論」第4回の授業において、29名の大学生を対象に完全自由記述による授業評価を実施した(資料1参照)。
- ②そのデータから修正版グラウンデッド・セオリー・ア

プローチ(以下M-GTA)を用いて、いくつかの概念を生成し、それらをカテゴリーごとに整理した。

- ③生成した概念やカテゴリーを説明するに十分な記述のあった学生数名に、さらに個人的なインタビューの協力を依頼し、より細かな語りのデータを得た。
- ④③をもとに②を修正・更新し、その内容を③の学生に提示し了解・納得を得た。

資料1 学生による自由記述授業評価

1. 以下の表をまとめてください。

大学におけるオンライン授業の課題	大学におけるオンライン授業の良さ
大学における対面授業の課題	大学における対面授業の良さ

2. あなたのオンライン授業に対する評価(—)、対面授業に対する評価(……)で図示してください。



(2) 研究協力者及び方法の設定理由

オンライン授業に関する先行研究(例えば田中2021)⁹⁾をはじめ、多くの大学における授業評価はアンケート調査とその統計処理に基づくものが多い。筆者は、こうした調査方法の限界性について以下のような問題意識を持つ。すなわち、人間の認識や判断には、そう認識し判断するに至るまでの経緯や文脈が存在するはずだが、そうしたプロセス性を量的なアンケート調査では計量できないということである。

例えば、「オンラインによる授業はわかりやすいですか」という学期末アンケートの質問に対し、ある学生が肯定的な回答をしたとしよう。そこでの回答は、その質問を与えられた瞬間における定点的な認識に基づいたものである。こうした手法で取られたデータは、どんなに多くのサンプル数を集めても、調査協力者たちの切り取られた認識の蓄積に過ぎず、時間軸に沿って大小生じたはずの認識の変化や、その認識の根本にある背景は全て排除されているのである。このように質問紙調査に基づく量的分析は経過(プロセス)の取扱を不得意としているため、授業という少なくとも4ヶ月16回に及ぶ時間の中で生じた認識の分析を十分にサポートしない。特にオンライン授業と対面授業という2つの対照的な事象に対する印象・評価を析出しようとする今回の試みにおいては、両者に対する印象・評価が反転するタイミングがあったことも想像される。そうした現象の機微を読み取る上では、量的なアプローチより質的なアプローチの方が、問題の本質に接近

できる可能性が高いと考えるのである。

もう1つ、量的アプローチにおける根本的な問題は、回答時において「回答者としての当事者意識」が欠如していることである。すなわち、一般にアンケート調査を行うとき、調査者と回答者の間の関係性は極めて薄く、回答者は回答に対して必ずしも真摯であるとは言えない。もちろん、そうした回答者の匿名性こそが客観性・再現性を担保するものであり、回答者間で生じるデータのバラつきについても、大きなサンプル数とその統計学的な処理で十分にカバーできることが量的研究の強みであることには理解が必要である。しかし、本研究の背景にはコロナ禍下という未曾有の状況において、学生たちがオンライン授業という新たな学習形態を受容し、特に葛藤を抱えながら自身の学びを再構築する一連のプロセス性がある。これに鑑みると、問いに対し丁寧かつ深層的に接近しようとする研究者と研究協力者の相互の関係性を重視することが事象の本質的な理解を助けるものと考えられるのである。

こうした文脈を踏まえ、研究協力者として本授業の学生を選択した最終的な理由は、①受講者の多くがコロナ禍以前に入学し対面授業を受講→コロナ対策によるオンライン授業→対面授業の再開というプロセスを経ていること、②本科目では「授業改善のPDCAサイクル」が全体のテーマとなっており、学習者の授業評価を授業改善にフィードバックすることの意義やその理論を講じていること、また、かねてより授業に対する辛辣な評価も授業改善の重要なエッセンスとして活用できることを学生に伝えていることで、自由記述におけるバイアスを軽減しやすいと考えたためである。

Ⅲ. 結果及び考察

(1)分析方法及び結果

自由記述及びインタビューによるテキストデータの処理にあたっては、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下:M-GTA、木下2003)¹⁰⁾を援用し、概念及びカテゴリーを生成しながら分析を進めた。具体的には、ある学生からの語りから生成した概念が、他の学生のインタビューデータにも具体例として見出されるかを吟味することで、概念としての妥当性を判断した。例えば、学生Aの記述または語りのデータから作成した概念が学生B、Cなどその他の学生から得たデータにも適合・類似する要素が見出されれば、その概念を有効なものとして判断できる。逆に他のデータにおいて適合・類似性を見出せる具体例が得られない場合は、グラウンデッド・セオリー(現場の実態に根

ざした理論)としての普遍性・一般性を疑い、概念としての立ち上げを却下した。こうした分析作業を繰り返す中で新たな概念が生成されなくなった段階を理論的飽和と判断し、分析を終了した。以上による分析結果が表1~4である。

(2)考察

以下、表1~4に示したカテゴリーを補足する形で考察を述べる。

最初に表1「オンライン授業の良さ」で析出された<空間的な優位性>について検討すると、【隙間時間の有効性】に異論はないとしても、【在宅学習の便利さ】は、表2の【自宅学習の難しさ】とも表裏一体であり一面的には評価できない。学生の認識の時間経過をたどると、当初は「学校に行かなくていいんだ」というある種の楽観的な感情が【在宅学習の便利さ】を表出させていても、次第に「テレビなどの誘惑に負ける」、「自宅では集中できない」といった次なる問題に直面するにつき、オンライン授業に対する評価は【自宅学習の難しさ】へと移行する。実際、田中(2021)¹¹⁾も指摘しているように、オンライン授業に参加していても(形式的に入室しても)、実際は他のことをしてしまって集中できていない実態が多くから回答された。次に<学習環境の向上>に着目する。ここに立ち上がる【雑音の少なさ】【発言のしやすさ】【板書・スライドの見やすさ】の3つの概念は、オンライン授業の本質的な長所ではなく、むしろ表4「対面授業の課題」における<学習環境上の改善点>に包括される3つの課題が克服されていないことによるアンチテーゼとして表出しているものと考えべきであり、我々教員側の指導法改善を大いに迫られるところである。最後に<学習方法の向上>についてである。【学び直しのしやすさ】については積極的な評価ができるが、【ペア・グループ活動の多様性】は、表4「対面授業の課題」にある【ペア・グループ活動の固定化】という問題が克服されていないことに由来するものである。このように見ると、オンライン授業に対して肯定的な評価が得られていたとしても、その理由がオンライン授業の本質的な利点に適合的なものは【学び直しのしやすさ】や【隙間時間の有効性】ぐらいであり、その他の概念についてはむしろ、対面授業において解決されるべき課題として受け止める方が妥当と考えられる。

次に表2「オンライン授業の課題」について検討する。まず、<学習空間としての限界性>については先述のように、しだいに【自宅学習の難しさ】を認識していくプロセスが析出された。この点については田中(2021)¹²⁾が指摘しているような、課題のフィードバックの頻度を高めるなど

表1 「オンライン授業の良さ」

カテゴリー	概念	定義
<空間的な優位性>	【在宅学習の利便性】	「家から出る」、「身支度」をするなど学校に向かうためのエネルギーが不要となる。
	【隙間時間の有効性】	空き時間に家事をしたり、学習や趣味に時間を使ったりすることができ、効率的な時間の使い方ができる。
<学習環境の向上>	【雑音の少なさ】	対面授業の際、他者の授業中の私語や内職が気になり集中力を削がれるが、オンラインではこうしたストレスがない。
	【発言のしやすさ】	教員から指名された際、他者の視線が気にならないため、自身の考えを述べやすい。
	【板書・スライドの見やすさ】	画面共有やPDFによる資料配布で、対面時よりも資料が見やすくわかりやすい。
<学習方法の向上>	【学び直しのしやすさ】	もう一度解説を聞きたいと思う内容の場合、再視聴が可能なので理解しやすい。
	【ペア・グループ活動の多様性】	グループ討議やペアワークは、ZOOMによって組み合わせがシャッフルされ多様な人々の意見に触れることができる。

表2 「オンライン授業の課題」

カテゴリー	概念	定義
<学習空間としての限界性>	【自宅学習の難しさ】	自宅の生活空間で学習を行うことによって集中力が散漫になる。
	【時間のロス】	1日の中で対面授業とオンライン授業が並立することにより、自宅と学校の往復という時間が発生する。
<教育方法論上の改善点>	【グループ活動の難しさ】	相手の表情や会話の間が読みにくく、話の切り出しにくさを感じる。
	【臨場感のなさ】	授業というよりも、テレビを見ているような感覚が生じ、自分に対して説明を受けているという当事者意識が出てこない。
	【集中力の低下】	自身に語りかけられる実感が湧かず、授業への集中力を維持できない。
	【学習者の反応の伝わりにくさ】	学習者の理解度や反応が伝わらず、授業者のペースで一方向的に説明が進行する。
<大学生生活全般に対する意欲の低下>	【心身へのダメージ】	画面に長時間向き合うことにより、心身に不快感が生じる。
	【サービスとしての不満】	対面・オンライン関わらず同じ授業料であることに対して不満を感じる。
	【「学友」意識の希薄化】	画面上でさえ顔を見えない時期が続き、同級生に対する仲間意識が芽生えない。

表3 「対面授業の良さ」

カテゴリー	概念	定義
<モチベーションの維持>	【集中力・意欲の向上】	授業者と眼差しを共有でき、授業を受ける者としての当事者意識が高まる。
	【学習の場の確保】	教室という空間にすることで学習モードに切り替わる。
	【緊張感・臨場感の高まり】	授業者、他の学習者と空間を共にすることによって意識が高まる。
<コミュニケーションの取りやすさ>	【グループ活動の充実】	会話によるやり取りだけでなく、表情・相づちなど、非言語的なコミュニケーションが充実する。
	【質問のしやすさ】	授業時間の中で自然に生じる「間」を読み取って質問ができる。
	【学習者の反応の伝達】	学習者の「わからなさ」「集中力の途切れ」が自然と伝わることで、授業者の説明のやり直しが行われる。
<学び合う喜び>	【サービスとしての満足感】	教員から直接「教えてもらった」という実感が湧く。
	【学習の場の共有】	友人と作業や演習、議論を交わすことで「一緒に学んだ」という実感が湧く。
	【友人に会える楽しさ】	対面授業があることで友人と会える頻度が高くなる。

表4 「対面授業の課題」

カテゴリー	概念	定義
<学習を始めるまでの困難>	【移動のエネルギー】	自宅から大学に向かうまでの一連の行動が億劫に感じる。
	【時間の非効率性】	移動時間、空き時間が不経済である。
<学習環境上の改善点>	【私語・雑音による集中力の低下】	一部の学生の私語や内職による雑音が気になり集中できない。
	【発言のしにくさ】	教員から意見を求められても、周囲の学生の視線が気になりうまく発言できない。
	【板書・スライドの見にくさ】	座席の位置やスライドのレイアウトによって板書やスライドが非常に見にくいことがある。
<教育方法論上の改善点>	【学び直しの難しさ】	授業は一回だけなので、もう一度説明を聞き直すことができない。
	【ペア・グループ活動の固定化】	座席がフリーである場合は、仲の良い友人が近くにいる状況であるため、グループ活動のメンバーが固定化する。
	【対面授業への疑問】	学習者によるアウトプットが少ない講義型授業に対し、対面授業の意義が見出せない。

の何らかの学習支援措置が必要となろう。また、おそらく本学に特異的に現れた課題として【時間のロス】が挙げられる。これは、定義でも示したように1日の中で対面授業とオンライン授業が並立することによって学生が学校と家を往復する、といった事態が発生したことによるものである。学生は往復の手間を省くために、空き教室や図書室などで視聴している事実も明らかとなっており、結果的にその空間に学生が集まるのであれば「感染症対策」によって実施したはずのオンライン授業の意義は損なわれてしまう。実験系授業と、講義系授業を有する本学の特性としてこの点は今後とも生じ得ることと想像されるので、建設的な解決策が講じられる必要がある。続いて「教育方法論上の改善点」として析出される【グループ活動の難しさ】【臨場感のなさ】【集中力の低下】【学習者の反応の伝わりにくさ】は、オンラインが宿命的に背負うリアリティの問題に起因する。一方で泰松ら(2021)¹³⁾は、オンライン授業では教員が通常の2~3倍の内容を話していることを指摘し講義時間の見直しに言及している。つまり、オンライン授業では、学習者が「教育方法論上の改善点」を求めるほどに一方的膨大な情報発信が行われている可能性があり、そうした授業の蓄積はやがて学生に「大学生活全般に対する意欲の低下」を引き起こさせている可能性が否定できない。【心身のダメージ】については、瀧口ら(2020)¹⁴⁾指摘したようなオンライン授業を受けるための環境整備の見直しが必要となろうし、【サービスとしての不満】【学友意識の希薄化】については、戴ら(2021)¹⁵⁾が指摘した「キャンパスライフレス」の文脈から、自粛によって失われた学生生活のリカバリーを支援しようとする教員のまなざしと、それに立脚する具体的な方策が期待されるところである。

続いて、表3「対面授業の良さ」についてである。泰松ら(2021)¹⁶⁾は「対面授業では、そこでしか分かち合えないもの

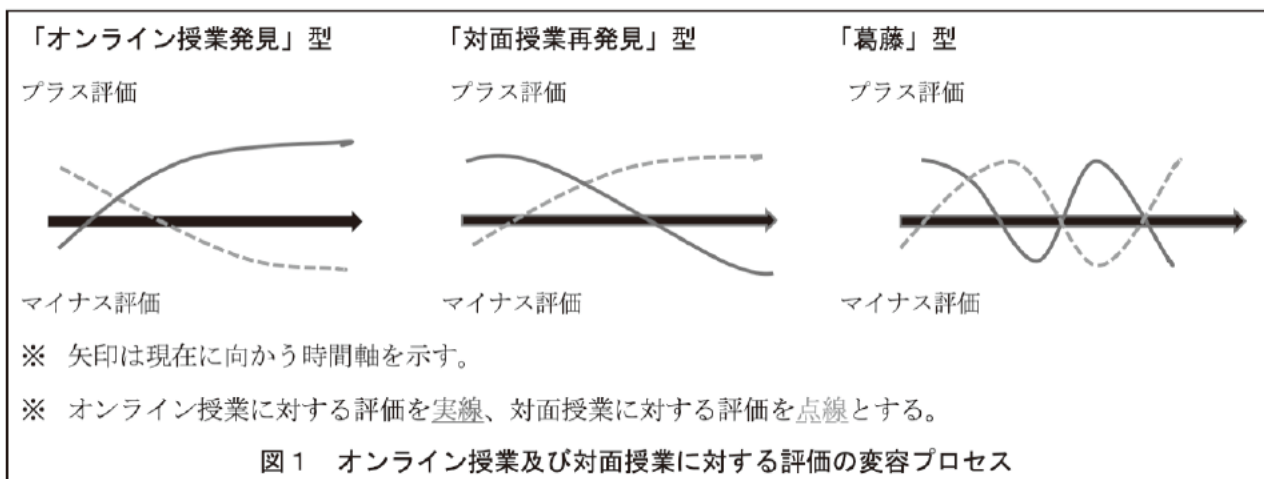
を提供しなければならない」と指摘しているが、ここで析出された「モチベーションの維持」「コミュニケーションの取りやすさ」「学び合う喜び」という3つのカテゴリーとそれに付随する9つの概念は「対面授業でしか分かち合えないもの」を端的かつ明快に示していると考えられる。

そして表4「対面授業の課題」である。これについては、先述「オンライン授業の良さ」の項で指摘した通りだが、「学習環境上の改善点」「教育方法上の改善点」の問題点が見出された。特に【私語・雑音による集中力の低下】【板書・スライドの見にくさ】【グループ活動の固定化】【発言のしにくさ】は教員側の指導法改善によってすぐにも解決できる問題であり、そうした授業改善の努力によって対面授業としての質を高めることが学生の「学習を始めるまでの困難」の克服を助けることにもなる。逆説的ではあるが、オンライン授業の登場と普及により、対面授業が克服すべき課題と対面授業にしかない魅力に対する期待が明らかになってきた。それらへの対応が不十分であれば、「なぜオンライン授業ではないのか」という【対面授業への疑問】を募らせていくことになる。

全体を考察して、表1「オンライン授業の良さ」と表4「対面授業の課題」、表2「オンライン授業の課題」と表3「対面授業の良さ」との間には、一定の対偶関係を見出すことができる。しかし、それは両者の間の二項対立関係を強調するものではなく、むしろ両者の相補的關係性を明示するものと考えられる。

最後に上述してきた2つの授業スタイルに対する認識のプロセス性について考察する。資料1に沿って学生が描いた図のうち、サンプル数の多かった3つのパターンを示す(図1参照)。

まず、「オンライン授業発見」型では、PCの操作の対応やネット環境の整備といった技術的な問題に対応しなけ



ればならないことへの戸惑いや、「本当にPC上で授業などできるのか?」といったある種の疑念が語られた。このため、オンライン授業導入当初は対面授業を支持する立場を取っていたが、PC操作にも慣れてくると、むしろ【雑音の少なさ】【発言のしやすさ】【板書・スライドの見やすさ】といった点で<学習環境の向上>を自覚するようになり、オンライン授業を受容しながら、ついには対面に対する評価と逆転していくプロセスが析出された。総じてこれらのパターンを描く学生からは、学習に対する意欲的な記述や語りが聞かれた。その勤勉な態度ゆえに、これまでの対面授業において【板書・スライドの見にくさ】や【私語・雑音による集中力の低下】といった課題に対してある種のストレスを抱えていたこともうかがえ、一方でオンライン授業固有の【集中力の低下】【臨場感のなさ】【自宅学習の難しさ】という課題については、元来の学習態度が勤勉なゆえに、それほど困難を抱えている様子は見受けられなかった。

次の「対面授業再発見」型では、やはり<学び合う喜び>が最も大きな要因として挙げられる。これこそが、先行研究の指摘する「対面にしかない価値」であり、大学が学生に提供すべき「キャンパスライフ」の姿を象徴している。一方で、オンライン授業開始時はその<空間的優位性>に魅力を感じ肯定的な評価を示しているが、本論でも示したような「オンライン授業の課題」である【集中力の低下】【臨場感のなさ】【自宅学習の難しさ】の壁にぶつかり、そのアンチテーゼとして「対面授業の良さ」を支持するという側面も見られる。

他方、「葛藤」型においては、オンライン授業と対面授業に対する評価がケースバイケースで判断が難しいことや、両者が互いに相補的な関係にあることを描こうとした意図が語られた。

全体に通底するのは、オンライン授業を肯定的に評価するプロセスは「オンラインでもいいか」という消極的な支持を含意するのに対し、対面授業を肯定的に評価するプロセスでは、学生が「対面授業にしかないもの」を見出しこれを積極的に支持していく態度が読み取れることである。このことに鑑みると、我々教員には「敢えて対面する意義」を踏まえた授業のデザインが求められていると言えよう。

IV. おわりに

ここで、本研究の成果と課題について整理したい。まず、本研究の成果は学生の自由記述による授業評価とインタビュー調査とそこから得られたテキストデータを元

に、その質的分析により、オンライン授業と対面授業のメリットとデメリットを構造的に示したことである。この分析から、オンライン授業のメリットとして表出される要因も、その背景には、本来対面授業において克服されるべき課題が根本にあることも見出された。この意味で本研究の知見は、泰松ら(2021)¹⁷⁾が示すような「対面でしか分かち合えない価値とは何か」、「オンライン授業で行った方が効率的な授業とは何か」といった新しい授業デザインに関する議論を深め、大学における教育活動の質的な転換・向上のあり方を検討することに寄与できる可能性を期待できる。

新型コロナウイルス感染症拡大防止策として急速に広まったオンライン授業は、その科学的な利便性が伝統的な対面授業の非合理性を照射した。このことはオンライン授業が早急に対面授業に取って代わりいくことを意味するものではないが、対面授業がこれまでのような唯一無二の手段ではなくオルタナティブな存在に成り代わったことは確かである。オンライン授業を巡る技術的・環境的課題が改善されればされるほど、対面授業には、学生が他者とのつながりにおいて<学び合う喜び>を享受する、という新たな付加価値が求められていく。少なくとも【私語・雑音による集中力の低下】【板書・スライドの見にくさ】【グループ活動の固定化】【発言のしにくさ】といった「対面授業の課題」が早急に克服されなければ、対面であることはむしろ弊害となりかねず、授業改善を巡る課題は喫緊なものと言えよう。

次に、本研究の限界と今後の課題について述べたい。本研究の研究対象は「教育課程論」受講者29名と限られた人数に限定し、分析手法はM-GTAを用いた。このため、生成された理論の有効性が成立する範囲には限界を伴うと同時に、今後においてその理論の検証が行われる必要がある。このことについて、木下(2003)¹⁸⁾はM-GTAを用いた研究の検証について「データが収集された現場と同じような社会的な場に戻されて(中略)、応用者が必要な修正を行う」と述べている。「データが収集された現場と同じような社会的な場」、すなわち教職課程以外の学生、薬学部の学生を対象としたり、コロナ禍下に入学した1、2年生を対象とした調査・分析を展開していくことが本研究の知見を更新・検証していくことになり得る。本知見が、ウィズコロナ及びアフターコロナ時代における学びのデザインに関する議論に新たな視座を提供すると共に、そのことが学生の学びの支援に少しでも貢献できれば幸いである。

[参考文献]

- 1) 中植正剛, 間渕泰尚, 酒井純: コロナ禍のオンライン授業で明らかになった女子大学生の情報機器環境, 教職課程・実習支援センター研究年報, 第4号, 2021, 103-109.
- 2) 瀧口芽依, 妻木菜緒, 菅原由莉子, 中島みづき, 佐藤健: 大学生のテレワークインテリア環境調査, 人間生活環境系シンポジウム報告集, 第44号, 2020, 75-76.
- 3) 越智徹, 館野浩司: 初年度情報リテラシー教育のオンライン授業における受講環境と疲労の調査, 情報教育シンポジウム論文集, 2021, 61-68.
- 4) 田中希穂: 大学におけるオンライン授業の実践と課題, 同志社大学教職課程年報, 第10号, 2021, 48-62.
- 5) 戴宇熙, 浦田悠, 村上正行: キャンパスライフレスが新入生に与える心理的影響, 日本教育工学会研究報告集, 第1巻, 2021, 34-40.
- 6) 北條陸実子, 戸城美佑, 遠山美樹, 中里英史, 古川真守, 城越望, 下村昂平, 森脇真人, 石原慶一: コロナ禍
下における大学生の主観的幸福度, 京都大学高等教育研究, 第26, 2020, 41-50.
- 7) 泰松範行, 石黒順子, 大村恵子: 新型コロナ(COVID-19)禍後の新大学生生活をデザインする必要性: オンライン授業に関する考察を踏まえて, 東洋学園大学紀要, 第29号, 2021, 194-209.
- 8) 上記4)同掲.
- 9) 上記4)同掲.
- 10) 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究へのいざない, 弘文堂, 2003.
- 11) 上記4)同掲.
- 12) 上記4)同掲.
- 13) 上記7)同掲.
- 14) 上記2)同掲.
- 15) 上記5)同掲.
- 16) 上記7)同掲.
- 17) 上記7)同掲.
- 18) 上記10)同掲.